



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	中学生の学級満足度の実態とそれを見立てる教師の認知に関する調査(fulltext)
Author(s)	山口, 遼; 橋本, 創一; 三浦, 巧也; 杉岡, 千宏; 廣野, 政人; 日下, 虎太郎
Citation	東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 15: 1-6
Issue Date	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/151521
Publisher	東京学芸大学教育実践研究支援センター
Rights	

中学生の学級満足度の実態とそれを見立てる教師の認知に関する調査

山口 遼*・橋本 創一**・三浦 巧也***・杉岡 千宏****・廣野 政人****・日下 虎太郎*

(2018年11月26日受理)

YAMAGUCHI, R., HASHIMOTO, S., MIURA, T., SUGIOKA, C., HIRONO, M. and KUSAKA, K.; A Survey on the Actual Condition of Classroom Satisfaction in Junior High School Students and Cognition of Teachers Facing It.

ISSN 1349-9580

In this survey, we examined the actual situation, relationships and differences of the students' classroom life satisfaction, school life motivation, social skills and learning outcomes from the questionnaire survey for the target junior high school students (n=192) and teachers (n=7). We also examined the actual condition and misunderstanding of teacher's support needs for students.

As a result, it was found that the score of each item is higher than the national average, and that junior high school students are motivated towards friends rather than building relationships with teachers. When the teacher grasped the support needs of the students, it was confirmed that there was a discrepancy between the situation where the students were located (required support needs) and the support needs of the students considered by the teacher.

As a future task, we will consider the cause of the deviation based on agreement or disagreement of cognition about the support needs of the teacher's students. It is also necessary to consider how much support is needed, the characteristics of students according to their degree of support and the development of their support.

KEY WORDS : Class Adaptation, Cognition, Junior High School Student

* *Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*

** *Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University*

*** *Tokyo University of Agriculture and Technology*

**** *The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*

1. はじめに

文部科学省(2018)¹⁾から、平成29年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」が発表されたが、かねてから生徒の学校適応についての問題は関心が高い。調査によると小中学校・高等学

校においては、前年度と比して暴力行為件数をはじめ、いじめや長期欠席(不登校)などが増加していた(暴力行為件数:63,325件【前年度:59,444件】、いじめ認知件数:414,378件【前年度:323,143件】、長期欠席者数:297,353人【前年度:285,684人】、不登校児童生徒数:193,674人【前年度:182,258人】)。学校適応の問題に着

* 東京学芸大学大学院教育学研究科

** 東京学芸大学教育実践研究支援センター 教育臨床研究部門

*** 東京農工大学

**** 東京学芸大学大学院連合学校

目すると、不登校以外に、欠席や遅刻・早退行動に至らずとも学校へ行くのが嫌だという「登校回避感情」を抱えている児童生徒もおり、彼らを不登校のグレーゾーンと捉えることが多い(森田:1991²⁾)。中学生を対象とした同調査では、いずれかの頻度で「学校へ行くのが嫌になったことがある」と答えた生徒は全体の70.8%とされた。不登校など、問題が外在化される以外にも、児童生徒一人ひとりがその内面に学校生活に対する不満や問題を抱えていることを示唆する。不登校などの問題は「どの子どもにも起こりうる」(文部科学省:1992³⁾)ことから、彼らが学校生活を楽しく意欲的に送るために、学校教師は生徒の問題行動や不登校等への予防的態度を持ち、生徒の内面を見取ったうえで、細やかな支援を行うことが必要だ。また、生徒指導上の諸課題全体への対策はこれからも急務とされ続けていると考えられる。

さて、生徒指導上の問題をはじめとし、学校不適応への対応は、保護者や地域など多方面との連携を学校教師による主導で取り組まれることが多い。学校教師においては、①生徒指導主事を中心とした生徒の実態把握、②校長を中心とした対応の方針の明確化、③教職員全員での取り組み、といった3つの行動をサイクルとして組織的に行っていく必要があるとされている(国立教育政策研究所:2010⁴⁾)。なかでも、児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題への予防的態度として、筆者は①にある生徒の実態把握が重要だと考える。全教職員で家庭や地域など、多方面から「情報収集」し、適切に「情報集約」する必要が大切とされる⁴⁾。

教師による生徒についての情報収集、適切な実態把握に向けたアセスメントツールは多く開発されている。なかでも、河村・田上(1997)⁵⁾が作成した「学級満足度尺度」は学級不適応児発見のための尺度として、近年多くの学校で使用されている。

そこで、本研究を、教師による生徒を適切に実態把握をするための基礎的研究に位置付け、「hyper-QU (hyper-Questionnaire Utilities)」を用いて、中学生の学級満足度・学校生活意欲・ソーシャルスキル・学習成績の実態を明らかにし、それらに関連したデータの収集及び整理を行う。

2. 本研究の目的

本研究は、対象中学校の生徒と教師に質問紙調査を実施し、以下の4点について明らかにする。

- ・対象中学校の生徒の学級満足度、学校生活意欲、ソーシャルスキル、学習成績の実態とその関連。
- ・対象中学校の生徒の学習成績の高低によって学級満

足度、学校生活意欲、ソーシャルスキルに違いがあるか。

- ・対象中学校の教師が生徒に関する支援ニーズをどのように把握しているのか。
- ・対象中学校の教師による生徒に関する支援ニーズの捉えとアセスメントによる生徒に関する支援ニーズの抽出にずれはあるのか。

3. 方法

3. 1 調査期間

2017年11月～2018年3月に実施した。

3. 2 調査対象

A県の公立中学校1校の第1, 2学年の学級担任(7名)と、その担任する学級の全生徒(7学級:239名)を調査の対象とした。そのうち、本調査では6学級分、生徒192名(80.3%)を分析対象とした。

3. 3 調査手続き

本研究は、学校長に研究目的と調査の内容を説明し、依頼書・質問紙の配布と実施を依頼した。

生徒の調査においては、担任教師に実施の手順や注意事項を統一した教示にしたがって実施することを依頼した。配慮として、回答用紙は記入終了後その場で封筒に入れ密封してもらうよう調査前に伝えることを確認した。

担任教師の調査についても同様に依頼した。

3. 4 調査内容・測定用具

生徒には4種類の質問紙による調査を行った。うち3種類は「学級満足度尺度(中高生用)」(河村, 1999)⁶⁾⁷⁾と「学校生活意欲尺度(中高生用)」(河村, 1999)⁶⁾⁷⁾と「ソーシャルスキル尺度(中学生用)」(河村, 2001)⁸⁾で構成される「hyper-QU (hyper-Questionnaire Utilities)⁹⁾」を用いた。学級生活における生徒の支援ニーズの段階の測定には「学級満足度尺度(中高生用)」を対応させた。学校生活における生徒の学力の測定には、各生徒本人の学習成績(各教科の五段階評定)を用いた。4種類とも生徒自らによる回答を求めた。

学級満足度尺度は標準化されている心理テストであり、生徒の学級に対する満足度の度合いを調査することができる尺度である。これは「承認」と「被侵害」の2つの下位尺度から構成されており、それぞれ5件法(5:とてもあてはまる～1:全くあてはまらない)で各10個の質問項目からできている。「承認」得点は学級内の級友や教師からの承認や受容の有無に関連があり、「被侵

害」得点は学級内のトラブルや不適応感の有無に関連がある。この下位尺度の単純加算によって得られた得点に基づいて「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」の4群に類型化することができる。

学校生活意欲尺度は、生徒のスクールモラルを測定するものである。学校生活上の代表的な領域から構成されており、各領域に対する意欲を測定する尺度である。測定する領域は「友人との関係」「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」の5領域であり、それぞれ5件法（5：とてもあてはまる～1：全くあてはまらない）で各4個の質問項目からできている。この下位尺度の単純加算によって得られた得点に基づいて、学校生活全体に対する意欲を測定することも可能である。

ソーシャルスキル尺度は、対人関係を築く際に必要な力を測定するものである。これは「配慮」と「かかわり」の2つの下位尺度から構成されており、それぞれ5件法（5：とてもあてはまる～1：全くあてはまらない）で各9個の質問項目からできている。「配慮」得点は友人の気持ちを配慮したり今ある関係を維持したりするものに関連があり、「かかわり」得点は自分から新たな人間関係を形成したり今ある関係を深めたりするものに関連がある。

学級担任教師には1種類の質問紙による調査を行った。具体的には、一人ひとりの生徒について「特別支援教育や生徒指導などに基づく支援の必要性の有無」「どういった支援ニーズか」を選択肢や自由記述による回答を求めた。これを担任教師が捉える生徒の支援ニーズの段階の測定に用いた。

3. 5 倫理的配慮

調査の依頼文において、本研究協力と質問紙への回答は自由意志であること、得られた情報は研究の目的以外に使用しないこと、学校の成績には関係がないこと、個人・学校が特定されないようにすることを明記した。本研究への協力と発表において、対象学校の生徒と教師から承諾を受けた上で、個人情報に十分留意し、倫理的配慮を行った。

4. 結果と考察

4. 1 対象中学生の学年集団の等質性

対象中学生のうち第1学年の生徒数は93名（48.4%）で、第2学年の生徒数は99名（51.6%）であった。

両学年集団によって学級満足度（承認、被侵害）・学校生活意欲（友人との関係、学習意欲、教師との関係、学級との関係、進路意識、学校生活意欲総合点）・ソ-

シャルスキル（配慮、かかわり）に差があるかどうかについて、対応のない*t*検定を行い、その結果を表1に示した。

学校生活意欲尺度の下位尺度である「学級との関係」のみ有意差がみられた（ $t(190) = 2.1, p < .05$ ）が、その他の項目において有意差は見られなかった。

以下、各学年の特性の違いがあることを考慮しつつも、学年差はないものとして統計処理を進めていく。

表1 中学生の学年ごとによる各尺度得点

学年	1年 (n=93)		2年 (n=99)		t検定 有意確率
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
承認	38.9	8.2	36.9	10	n.s
被侵害	16.8	7.9	17.5	7.9	n.s
友人との関係	18.5	2.2	18.0	2.8	n.s
学習意欲	16.3	3.1	16.3	3.4	n.s
教師との関係	14.7	4.3	13.7	4.6	n.s
学級との関係	16.8	4.1	15.6	3.7	$p < .05$
進路意識	16.1	4.1	15.0	4.3	n.s
学校生活意欲総合点	82.3	13.7	78.5	13.3	n.s
配慮	33.1	3.4	33.5	3.2	n.s
かかわり	30.6	5.4	29.4	6.2	n.s

4. 2. 1 対象中学生の実態

中学校1・2年の生徒192名に、彼らが在籍する学級に対する満足度の度合い、学校生活に対する意欲の度合い、対人関係を築く折の考え方について尋ね、その結果を表2に示した。

学級満足度尺度の下位尺度である「承認」と「被侵害」においては、「承認」得点の平均が37.9点（SD：9.2）、「被侵害」得点の平均が17.2点（SD：7.9）であった。この2つの尺度の得点に基づいて類型化された4群の各人数は、「学級生活満足群」が124名（64.6%）、「非承認群」が26名（13.5%）、「侵害行為認知群」17名（8.9%）、「学級不満足群」が25名（13.0%）であった。全国平均⁹⁾は、「学級生活満足群」が37%、「非承認群」が17%、「侵害行為認知群」が15%、「学級生活不満足群」が31%であった。

学校生活意欲尺度の下位尺度である「友人との関係」、「学習意欲」、「教師との関係」、「学級との関係」と「進路意識」においては、「友人との関係」得点の平均が18.2点（SD：2.5）、「学習意欲」得点の平均が16.3点（SD：3.3）、「教師との関係」得点の平均が14.2点（SD：4.5）、「学級との関係」得点の平均が16.2点（SD：3.9）、「進路意識」得点の平均が15.5点（SD：4.2）であった。下位尺度の単純加算によって得られる「学校生活意欲総合点」の平均は80.4点（SD：13.6）であった。全国平均は、「友人との関係」得点が17.0点、「学習意欲」得点が14.8点、

「教師との関係」得点が13.8点、「学級との関係」得点が15.2点、「進路意識」得点が14.6点、「学校生活意欲総合点」が75.4点であった。

ソーシャルスキル尺度の下位尺度である「配慮」と「かかわり」においては、「配慮」得点の平均が33.3点 (SD: 3.3), 「かかわり」得点の平均が30.0点 (SD: 5.9) であった。全国平均は、「配慮」得点が30.7点, 「かかわり」得点が27.8点であった。

対象中学校の生徒は全国と比べると多くの生徒が学級生活満足群に属しており、非承認群をはじめ侵害行為認知群・学級生活不満足群に属する生徒の割合は小さいことが明らかになった。また、学校生活意欲やソーシャルスキルに関する各項目においても得点は全国と比べて高いことも分かった。

表2 対象中学生の各尺度得点と全国平均

	対象中学校 (n=192)		全国
	平均	標準偏差	平均
承認	37.9	9.2	33.5
被侵害	17.2	7.9	21.5
友人との関係	18.2	2.5	17.0
学習意欲	16.3	3.3	14.8
教師との関係	14.2	4.5	13.8
学級との関係	16.2	3.9	15.2
進路意識	15.5	4.2	14.6
学校生活意欲総合点	80.4	13.6	75.4
配慮	33.3	3.3	30.7
かかわり	30.0	5.9	27.8

4. 2. 2 学校生活意欲尺度下位尺度の比較

対象中学生において、学校生活意欲尺度の下位尺度(友人との関係, 学習意欲, 教師との関係, 学級との関係, 進路意識)ごとに差があるかどうかについて、対応のあるt検定を行い、その結果を表3に示した。

「友人との関係」は、「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」よりも有意に得点が高かった ($t(191) = 8.4, p < .001$; $t(191) = 13.2, p < .001$; $t(191) = 9.3, p < .001$; $t(191) = 8.8, p < .001$)。

「教師との関係」は、「友人との関係」「学習意欲」「学級との関係」「進路意識」よりも有意に得点が低かった ($t(191) = 13.2, p < .001$; $t(191) = 6.7, p < .001$; $t(191) = -6.3, p < .001$; $t(191) = -3.9, p < .001$)。

統計的有意差は分からなかったが、全国の結果においても、五領域の中で「友人との関係」得点が一番高く、「教師との関係」得点が一番低かった。これらより、学校生活の代表的な領域における、中学生の意欲の方向性に特徴があると考えられる。なかでも、中学生の対人関係

において、教師との関係構築よりも友人の方に意欲があるといえる。

表3 学校生活意欲尺度下位尺度得点の比較

	1:友人との関係	2:学習意欲	3:教師との関係	4:学級との関係	5:進路意識
1:友人との関係		1>2, $p < .001$	1>3, $p < .001$	1>4, $p < .001$	1>5, $p < .001$
2:学習意欲			2>3, $p < .001$	n.s.	2>5, $p < .01$
3:教師との関係				4>3, $p < .001$	5>3, $p < .001$
4:学級との関係					n.s.
5:進路意識					

4. 3 各下位尺度、学習成績の関連

対象中学生において、学級満足度(承認, 被侵害)・学校生活意欲(友人との関係, 学習意欲, 教師との関係, 学級との関係, 進路意識, 学校生活意欲総合点)・ソーシャルスキル(配慮, かかわり)・学習成績(主要五科目【国語社会数学英語理科】, 実技四科目【音楽美術保健体育技術家庭】)に関連があるかどうかについて、相関分析を行い、その結果を表4に示した。

相関の強さの強弱に違いはあるものの、すべてに相関が確認された。その中でも、「学校生活意欲総合点」は「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」「承認」「かかわり」と強い正の相関が見られた ($r = .71, p < .01$; $r = .77, p < .01$; $r = .79, p < .01$; $r = .71, p < .01$; $r = .80, p < .01$; $r = .71, p < .01$)。それ以外に、「承認」は「かかわり」と、「主要五科目」は「実技四科目」と強い正の相関が見られた ($r = .75, p < .01$; $r = .76, p < .01$)。

これらより、例えば「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」のうちひとつでも意欲が高まっていることが確認できれば、学校生活意欲総合点も高いことが想定できる。また、学校生活における意欲が高ければ、友達や教師からの受容感も高く、友達に対する上手な振る舞いもできていると考えられる。意欲と受容、振る舞いに関してはその相互の関連性や影響について更なる検討が必要であると考えられる。

以下、学習成績は主要五科目と実技四科目で分けて統計処理をせずに、各教科の五段階評定値を合算したものを「学習成績」(Min: 5 ~ Max: 45)として扱う。

表4 各下位尺度, 学習成績の関連

	承認	被侵害	友人との関係	学習意欲	教師との関係	学級との関係	進路意識	学校生活意欲総合点	配慮	かかわり	主要五科	実技四科
承認		-0.542**	0.684**	0.537**	0.604**	0.649**	0.51**	0.803**	0.573**	0.749**	0.338**	0.302**
被侵害			-0.621**	-0.442**	-0.4**	-0.576**	-0.285**	-0.609**	-0.476**	-0.566**	-0.31**	-0.203**
友人との関係				0.398**	0.381**	0.607**	0.274**	0.669**	0.491**	0.629**	0.295**	0.232**
学習意欲					0.421**	0.431**	0.423**	0.71**	0.383**	0.481**	0.533**	0.37**
教師との関係						0.489**	0.404**	0.771**	0.378**	0.466**	0.215**	0.25**
学級との関係							0.396**	0.791**	0.459**	0.546**	0.208**	0.201**
進路意識								0.711**	0.51**	0.523**	0.159*	0.279**
学校生活意欲総合点									0.552**	0.707**	0.364**	0.36**
配慮										0.556**	0.298**	0.329**
かかわり											0.307**	0.275**
主要五科 (国数英理社)												0.762**
実技四科 (音美保体技家)												

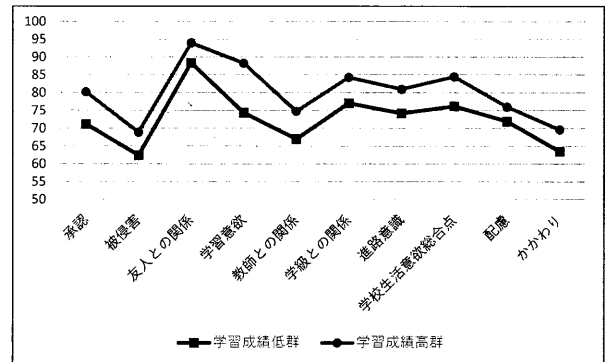
4. 4 学習成績による学級満足度・学校生活意欲・ソーシャルスキルの比較

対象中学生において、学習成績の高さによって2群に分類した。各生徒の学習成績の平均が29.2 (SD: 6.5)であったので、この平均値を境にして学習成績が高い群 (30~45) と低い群 (5~29) とした。学習成績高群は平均が34.2 (SD: 3.7) で97名、学習成績低群は平均が24.0 (SD: 4.4) で95名であった。

その後、学習成績の高低による学級満足度 (承認, 被侵害)・学校生活意欲 (友人との関係, 学習意欲, 教師との関係, 学級との関係, 進路意識, 学校生活意欲総合点)・ソーシャルスキル (配慮, かかわり) に差があるかどうかについて、対応のないt検定を行い、その結果を図1に示した。

全ての下位尺度において、学習成績高群が低群より有意に得点が高いことが確認された。(「承認」得点: (t (181) = -3.5, p<.001), 「被侵害」得点: (t (164) = 2.9, p<.01, 「友人との関係」得点: (t (148) = -3.1, p<.01), 「学習意欲」得点: (t (172) = -6.5, p<.001), 「教師との関係」得点: (t (190) = -2.4, p<.05), 「学級との関係」得点: (t (182) = -2.6, p<.01), 「進路意識」得点: (t (177) = -2.2, p<.05), 「学校生活意欲総合点」: (t (172) = -4.4, p<.001), 「配慮」得点: (t (157) = -4.0, p<.001), 「かかわり」得点: (t (173) = -3.3, p<.001))

学習成績が高いほど、学級満足度や学校生活意欲, ソーシャルスキルの各得点も高いことが明らかとなった。生徒にとって学校生活における基盤は学習, 人間関係などがある。学級満足度・学校生活意欲・ソーシャルスキル・学習成績のそれぞれに相関が確認され、どちらが先行条件か不明であるが、学習成績の向上と安定が生徒一人ひとりの学校生活での安定にもつながることは推測できる。生徒一人ひとりが楽しく意欲に満ちた学校生活を送るためにも、学習成績による生徒個人の実態把握とそれに応じた支援の考案は求められている。



* 「被侵害」を逆転項目処理している
* 各尺度得点を割合に直している

図1 学習成績高低群による各尺度の比較

4. 5 教師の生徒の支援ニーズに関する認知の実態

対象教師に、担任教師として捉える生徒の支援ニーズについて尋ねた。その結果、「特別支援教育や生徒指導に基づく支援の必要性の有無」においては、必要性が「有」とされた生徒は43名 (22.4%), 必要性が「無」とされた生徒は149名 (77.6%) であった。必要性が「有」とされた生徒の「具体的な支援ニーズ」について、「特別な教育的支援 (軽) (遅れを含む)」が19名、「特別な教育的支援 (重) (診断有, 通級)」が4名、「生徒指導」が17名、「非行少年」が6名、「不登校」が7名であった。これらの生徒のうち、生徒1人につき支援ニーズが2つであった生徒は9名、3つであった生徒は1名であった。

この43名のうち、学級満足度の下位尺度である「承認」と「被侵害」の2つの尺度の得点に基づいて類型化された「学級生活満足群」以外の群 (非承認群・侵害行為認知群・学級不満足群) に該当し支援が必要とされた生徒は27名であった。つまり、教師が指摘した生徒の支援ニーズとhyper-QUによって明らかになった生徒の支援ニーズの一致率は62.8%と言える。

教師が生徒の支援ニーズを捉えるとき、生徒が置かれている状況 (求める支援ニーズ) と教師が考える生徒の支援ニーズとの間に認識のずれがあることが確認された。教師による生徒の学校生活全般を含めた実態把握は、

教師の一方的なものに留まり必ずしも適切でない場合があると考えられる。

5. おわりに

本調査では、対象中学校の生徒と教師への質問紙調査の実施から、生徒の学級満足度・学校生活意欲・ソーシャルスキル・学習成績について、その実態や関連、違いについて検討してきた。また、教師の生徒の支援ニーズに関する認知の実態とずれについても検討した。

教師が生徒の実態をアセスメントする材料は多岐にわたる。なかでも生徒一人ひとりの授業中の様子や学習成績は生徒の実態を考える上でも扱いやすくて確である。しかし、「学校生活全般」の実態把握については、教師の一方的な評価である可能性は否めない。的確な実態把握に向けて、例えば対象生徒の周りの友人から本人についての聞き取りを行うことが考えられる。中学生の対人関係において、教師との関係構築よりも友人の方へ意欲が向いていることから、教師—生徒の関わりからの実態把握のみならず、生徒—生徒の関わりにも目を向けていくことが必要であろう。その他にも、本調査で扱った客観的な評価が必要である。生徒本人による自己評価や、他者評価もセットにしたアセスメントが、教師による生徒の支援ニーズに関する認知のずれを無くし、生徒が必要とする支援ニーズを適切に把握することが可能となるだろう。

今後は、教師の生徒の支援ニーズに関する認知の一致・不一致をもとにずれが生じる要因についての検討を進めるほか、支援がどれぐらい必要とされているか、その要支援度に応じた生徒の特徴と彼らの支援の展開についての検討も必要であると考えられる。

文 献

- 1) 文部科学省：平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について。2018.
- 2) 森田洋司：「不登校」現象の社会学。学文社、1991.
- 3) 文部科学省学校不適応対策調査研究協力者会議：「登校拒否（不登校）問題について」—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して—。1992.
- 4) 国立政策研究所生徒指導・進路指導研究センター：生徒指導の役割連携の推進に向けて—生徒指導専事に求められる具体的な行動（中学校編）。2010.
- 5) 河村茂雄，田上不二夫：いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成。カウンセリング研究，30，112-120，1997.
- 6) 河村茂雄：楽しい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」実施・解釈ハンドブック（中学校編）。図書文化社，1999.
- 7) 河村茂雄：QUESTIONNAIRE - UTILITIES。図書文化社，1999.
- 8) 河村茂雄：ソーシャル・スキルに問題が見られる生徒の検討。岩手大学教育学部研究年報，61，77-88，2001.
- 9) 河村茂雄：hyper-Questionnaire Utilities。図書文化社，2010.